

## V125c 大学 VLBI 連携の現状と将来

藤沢健太, 大学 VLBI 連携

大学・共同利用研究機関は第3期中期計画期に入った。大学 VLBI 連携は第3期の6年間を見据えた研究活動を行い、また将来計画の検討を進めている。

最近の1年間では合計31回、280時間の VLBI 観測を実施しており、ほぼ定常的な観測ができている。観測成果をまとめて発表するために、2016年10月発行の PASJ (Vol 68, 第5号) で大学連携の特集を行ってもらった。光赤外線の間連携と合わせて合計9編の論文が出版されている。また、東アジア VLBI 観測網 (EAVN) 構築のために試験観測を行っている。これは大学 VLBI 連携の将来計画の一つである。

一方、北大が運用してきた苫小牧 11m は 2015 年度末に運用を停止した。また国土院のつくば 32m は 2016 年 12 月末で運用を停止する。これらの望遠鏡の停止に伴って、大学 VLBI 連携の組織にも変更が生じている。すでに運用期間の長い山口局・茨城局の長期的な運用計画も含めて、大学 VLBI 連携の将来計画に関する議論が活発になっている。

2016 年 7 月に、茨城局において大学 VLBI 連携のワークショップを開催し、特に将来計画に特化した議論を2日間行った。将来計画の議論は現在も継続しているが、これらの議論を通じて複数の研究計画が立案され、また実施されている。たとえば少数基線による大規模観測 (茨城- 山口等)、突発天体・時間領域天文学を目指した研究計画、東アジア連携への計画的展開である。